

血液培養からRGMを検出したことにより早期診断・治療に貢献できた症例

◎緒方 彩乃¹⁾、日高 敏哉¹⁾、西澤 莉奈¹⁾、林 真希¹⁾、大野 智絵¹⁾、多田隈 理佐子¹⁾、吉田 雅弥¹⁾、山崎 卓¹⁾
熊本赤十字病院¹⁾

【はじめに】迅速発育抗酸菌(Rapidly growing mycobacteria:以下RGM)は、非結核性抗酸菌の中でも培養開始から7日以内に発育し、水や土壤などの環境中に存在する。今回、RGM感染を疑っていない患者からRGMの1種である*Mycobacterium mucogenicum* groupを検出し、早期に臨床へ菌種の報告を行ったことで診断と治療に貢献できた症例を経験したので報告する。

【症例】慢性腎不全のため当院にて維持透析中の60代女性。3日前から倦怠感や嘔吐、脱水症状が認められ、全身状態がやや不良の状態で当院を受診した。受診時に各種血液検査に加え、血液培養が2セット提出された。

【微生物学的検査】血液培養開始から約55時間後に1/2セットで好気ボトル1本が陽性となり、グラム染色にて顆粒状のグラム陽性桿菌様の菌体を認めた。グラム染色像より抗酸菌を疑い、チール・ネルゼン染色を実施したところ陽性に染まった。培養にはTWINプレート47(極東製薬工業株式会社)を用いて35°Cと室温にて培養を実施し、約48時間後には微小コロニーの発育を認めた。同

定検査はMALDI Bityper Sirius(BRUKER)を用いて実施し、*M.mucogenicum/phocaicum* (Score Value 2.06)と同定した。薬剤感受性検査はドライプレート栄研 DP1R(栄研化学株式会社)を用いて行った。

【まとめ】今回、血液培養からRGMの1種である*M.mucogenicum* groupを検出した症例を経験した。血液培養陽性時のグラム染色像から抗酸菌を疑い、比較的早い段階で臨床へ菌種の報告を行うことができた。その結果、早期にAntimicrobial Stewardship Team (AST)による介入や感染源特定のための各種培養が追加され、カテーテル関連血流感染症(CRBSI)の診断となり治療が開始された。RGMは呼吸器感染症以外にも皮膚軟部組織や骨などの深部感染症や、カテーテル関連血流感染症の起炎菌として近年報告されており、罹患率も増加傾向にある。本症例の様な患者背景でグラム染色像にて顆粒状の所見を認める場合や菌体が認められない場合には、RGMを考慮して検査を実施することが重要である。

〈連絡先〉096-384-2111 (内線:6378)